

藤井

ふじい くみこ

久美子さん

琴の団体《千歳楽風会》の会長・藤井久美子さんは、南雲秀観(なぐも しゅうえい)の雅号で、昭和59年の団体設立以来、長年にわたり琴の普及に努めています。昨年度には、千歳市文化団体連絡協議会の文化功労賞を受賞しています。

今年8月12日に開催された同団体主催の《お琴の演奏会》も盛況に終わり、今後は、北カス文化ホールで開催される《市民芸術祭》(10月14日)《邦楽邦舞の会》、11月3日《総合舞台》にも出演されます。

藤井さんに、琴に対する思いを聞きました。

●琴を始めたきっかけは？

「父は尺八、母は琴の先生でした。生まれたときから、琴に囲まれていましたから、物心がつく前から琴を弾いていたと思います。」

記憶にあるのは、6歳の初舞台です。当時は、2か月に1度ほどのペースで、あちこちで演奏会がありましたから、稽古も大変でした。小さなころは、琴を弾くことは私の《日常》でしたが、中高生くらいから、友人と出かけることが楽しくなると、稽古が嫌になりましてね(笑)。

でも、20代のころ、東京での大きな演奏会でミスをしたときは、ショックを受けました。『ああ、これはいけない』と思って、稽古に熱が入るようになっていました。」

●団体を立ち上げたきっかけは？

「もともと楽風会は、母が立ち上げた団体です。ところが母は、59歳の若さで急逝してしまつたのです。何人も生徒さんがいましたし、代わりに指導できる者はおりませんでしたから、私が引き継ぐことにしました。」



受け継いだ伝統と磨き続ける芸風

「そこに《琴》があるから、
《琴》を弾き続ける」

ただ、私は《2代目》といわれることに抵抗がありました。母には母の、私には私の芸風がありますから。そこで、新しく団体を立ち上げ直して、一から始めることにしたので。でも、団体名はそのまま受け継ぎました。それから、私の雅号の《南雲》姓は旧姓で、結婚してからも変えることはありませんでした。そこには、両親から受け継いだ伝統を守りたいという気持ちもあつたのでしよう。何十年も前に、母に習っていたという生徒さんが、今でも《南雲》の名前を頼りに訪ねてくださることがあります。母の偉大さを感じる瞬間です。」

●長年、琴を弾き続けてきた原動力は？

「実は、自分でも理由がわからないのです。登山家は《そこに山があるから》と《山》でしよつ。それと同じで、



団体会員による練習風景。演奏会に向けて、指導にも熱が入る(8月8日撮影)。

プロフィール

■藤井久美子(ふじい くみこ)さん/清水町在住/千歳楽風会(昭和59年設立)会長/両親の影響で幼少期から琴を始める。現在は、団体の指導者として、後進の育成に努めるほか、千歳邦楽舞協会の行事や慰問活動など、精力的に舞台演奏を行っている。

そこに琴があるから、琴を弾き続ける、そういう気持ちです。いつもそばにあった、この古く、美しい楽器を《すたれさせてはいけない》という思いもあります。そのために、演奏会などでは、古典ばかりではなく、新曲も取り入れるようにして、聞いてくださる方が飽きないための工夫もしています。

音を出すだけなら、スマートフォンでも十分ですが、琴の魅力は、自分の指の力加減一つで音色をあやつれること。この手に伝わる弦の《触感》を大切に、今後とも指導を続けていきたいと思ひます。」

伝統を守ること、新しい風を取り入れること。どちらによつても、琴を後世に伝えたいという藤井さん。その静かな情熱が奏でる音色には、深い味わいを感じられます。